

# 道内洋上風力適地 8割で海鳥に悪影響も 指定要件見直しなど国は対応を

06/12 10:37

電中研が調査対象にした13種の海鳥(★は絶滅危惧種)

★ウミガラス(オロロン鳥)、★ウミスズメ、★エトピリカ、★ケイマフリ、ウトウ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウミウ、★ヒメウ、★チシマウガラス、カワウ、コシジロウミツバメ、オオミズナギドリ

Q 海上に風車を建てて発電する「洋上風力」が注目を集めていますね。

A 再生可能エネルギー普及のため、国は洋上風力に適した海域を「促進区域」に指定し、事業者に最長30年の占有を認める取り組みを進めています。ただ、風速や風向きの良さから洋上風力の適地とされる道内の海域のうち最大8割が、発電事業を行った場合、海鳥の生態に悪影響を与える恐れのある場所であることが、電力中央研究所(電中研)の調査で明らかになりました。

Q 対象とした海鳥は。

A ウミガラス(オロロン鳥)、エトピリカなど絶滅危惧種を含む13種=表=です。調査は洋上風力の先進国である英国やドイツで用いられている評価手法を応用しました。まず洋上風力に適した道内の海域を500メートル四方のメッシュ(格子)に分割し、営巣地の数や位置情報、採餌の範囲から、メッシュごとに分布密度を推計。その上で《1》風車に鳥がぶつかるバードストライクの危険性《2》風車の建設で生息地を変えてしまう可能性《3》海鳥の希少性—を指標に、生態に与える懸念度合いを数値化しました。

Q どの海域の懸念が特に高かったのですか。

A 石狩・小樽沖、留萌・羽幌沖から稚内周辺にかけて、また釧路・根室周辺が、3段階評価のうちリスクの高い「懸念大」または「懸念中」に該当しました。一方、オホーツク管内、渡島・檜山管内、胆振・日高管内の大部分は、比較的影響の少ない「懸念小」でした。ただ電中研は懸念小であっても「渡り鳥が通過する可能性があり、配慮は必要」と指摘しています。

Q なぜこのような調査を行ったのでしょうか。

A 洋上風力の促進区域を選ぶ際の国の指定要件に、海鳥など生態系への影響を考慮する項目が抜けているためです。これでは国の指定後に、事業者が周辺環境への影響を現地で調査してみたら、実際には海鳥が非常に多くて「事業が成り立たない」なんてことになりかねません。電中研は、国が候補地を選定する段階から、海鳥などに配慮した慎重な検討を行うことが重要だと強調しています。

Q 道内は洋上風力の有望地なのに、実現はそう簡単ではないのですね。

A 巨額の設備投資が必要な洋上風力は「稼働率」が重要で、長期間、安定的に発電できない環境では採算が取れません。英国では、海鳥への影響を巡って建設許可が取り消されたり、訴訟になったりした事例もあります。近年は、野鳥観察を目的に来道する外国人観光客も増えています。クリーンな再生エネの普及はもちろん大切ですが、希少な海鳥が道内から消えてしまえば、本末転倒です。国には指定要件を見直すなど対応を急いでほしいですね。（佐々木馨斗）